

The Green Door
緑のドア

P.141

大都市ニューヨークでは、冒険がいつも待っている。

全ての角で、目が私たちを見ているか、指が私たちを指している。

冒険がそこにある。

しかし、私たちのほとんどがそれを一度も目にすることはない。

ルドルフ・ステイナーは、本物の冒険家だった。

異なる何かを探して彼が出かけない夜はほとんどなかった。

彼はいつも次の角を負かったところに何が待っているのか興味があった。

ある晩、ルドルフは都市の古い地域の通りをゆっくり歩いていた。

その晩はたくさんの人がその通りを歩いていた。

家に帰っている人たちもいた。

他の人たちは、どこかのレストランへ夕食を食べに向っていた。

彼はにぎやかなレストランを通り過ぎ、その隣には開いているドアがあった。

そのドアの上には、ドクターのオフィスの看板がかかっていた。

とても大柄な男がそのドアの所に立っていた。

彼は、通り過ぎる人たちにカードを渡していた。

ルドルフは、そのような人を以前に見たことがあった。

そのカードには、3階のドクターのオフィスの名前が書いてあるのだろう。

ルドルフは見ずにそれを受け取った。

さらに歩いてから、彼はそのカードを見た。

彼は驚いた。

彼はそれを裏返し、興味を持って再びそれを見た。

片側には何も書いていなかった。

反対側には3つの単語が書かれていた：「緑のドア。」

P.142

3歩先で別の男が受け取ったカードを捨てた。

ルドルフはそれを拾った。

これは、ルドルフが自分のカードにも書かれていると予想したものだだった。

ルドルフは振り返り、ドクターのオフィスを再び通り過ぎた。

その男は別のカードを彼に渡した。

再びカードには、「緑のドア」と書かれていた。

3,4枚のカードが通りに落ちていた。

人々がそれらを捨てたのだ。彼はそれらを見た。

全てにドクターの名前が書かれていた。

ルドルフはカードを受け取ったところへ戻り、建物を見上げた。

彼は冒険が自分を呼んでいると思った。

一階には小さなレストランがあった。

2階には人が住んでいる部屋があった。

その上にはドクターのオフィスがあった。

ルドルフはその建物に入り、2階へと歩いて上がった。

彼はあたりを見渡し、緑のドアを見た。

彼はその緑のドアへと真っ直ぐ歩いていき、大きな音でノックした。

P.143

小さな音が聞こえ、それからゆっくりとドアが開いた。

まだ20歳にもなっていない少女がそこに立っていた。

彼女の顔はとても白く、彼女はとても弱っていた。

彼女は片手を伸ばし、倒れ始めた。

ルドルフは彼女をキャッチし、中へ運び、ベッドの上に寝かせた。

彼はドアを閉め、周りを見た。

その部屋は貧しかったが、とてもきれいだった。

その少女は、目を閉じたまま横たわっていた。

しかし、今彼女は目を開け、若者は彼女の顔を見た。

彼女の目は灰色で鼻は小さく、髪の毛は茶色だった。

それは、これを素晴らしい冒険にする顔だった。

しかし、彼女の顔は痩せていて、青白かった。

その少女はルドルフを見て微笑んだ。

「私は倒れたのでしょうか？」彼女は言った。

「3日間食べないとそうなるんです。」

P.144

「何だって！」ルドルフは叫んだ。

「僕が戻るまで待っていてください！」

彼穂その緑のドアから通りへと走り出た。

20分で彼は戻ってきた。

両腕は食料品店から買ってきたものでいっぱいだった。ーパンとバター、加工肉、ケーキ、魚、牛乳、それからもっと。

「バカな人だけが、」ルドルフは言った。

「食べるのを止めるんです。」

君はそんなことをしてはいけない。

夕食の準備が出来ました。」

彼は、彼女がテーブルの椅子へと移動するのを手伝った。